

Century Books

正宗白鳥

福田清人
佐々木徹

● 人と作品

清水書院



正宗白鳥 ■

人と作品 24

350円

昭和42年3月30日 第1刷発行 ©

昭和44年5月20日 第2刷発行



- 編著者……………^{ふくだきよと}福田清人 / ^{ささきとおる}佐々木 徹
- 発行者……………清水幸雄
- 印刷所……………三洋印刷
- 発行所 / 清水書院 / 東京都新宿区東五軒町5
Tel・東京(260)5261~6 / 振替口座・東京5283
郵便番号 162

検印省略

落丁本・乱丁本は
おとりかえします

CenturyBooks

清水書院



正宗白鳥

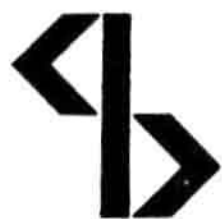
● 人と作品 ●

24

立教大学日本文学研究室

福田 清人

佐々木 徹



CenturyBooks

清水書院

原文引用の際、漢字については、
できるだけ当用漢字を使用した。

序

この叢書の「人と作品」は、若い世代を対象として、わが国の近代文学史を彩るいろど代表的作家の伝記とその主要な作品を解説したものである。

近代の科学技術の発達の反面、人間性の疎外をうれえ、人間性の回復によって高貴な精神文化の城を守ろうとのこのシリーズ刊行の意図から、まず右のような近代作家についての企画の相談を私は受けたのであった。そして執筆者も私の出講している立教大学の研究室関係者の新鮮なペンを期待したいということで、その多くは、そういう適任者を推薦した。

そして、第一期九冊は一九六六年初夏に、第二期十冊は同年晩秋にそれぞれ刊行されたが、幸い好評のようである。

つづいてここに第三期の十冊を発行する運びになったが、その一冊がこの『正宗白鳥』である。

執筆者佐々木徹君は立教大学大学院博士課程にあり、かたわら研究室の助手をつとめている。学部時代から自然主義を研究し、その力量の一端は既刊『島崎藤村』に示している。そして「正宗白鳥」はその修士論文でもあった。本書では、その研究に基づき、本書のねらいにそうように平明な叙述を試みた。

私は監修者としての責任上この原稿に目を通しつつ、かつてこの作家と対談放送した日のことを思い出し

た。終戦後、その東京の家が焼けたので、疎開したまま、氏が軽井沢の別荘に住みつき、時々上京される機会をとらえたのであった。私は、五十年以上にわたる文壇のうつりかわりを眺められた氏の立場についての感想を最後にうかがうと、

「知らず知らず時代の思想に感化されておる。誰でもそうだろう。そうでなくては時代におくれる。時代にあうように努めるのが自然だ。たしかにぼくなど一生安閑とここまできたのだけれど、何かといえはやはり自然に時代に合っていた。ある意味でいえば、ぼくの文壇生活はありがたいことと思っている。」と述懐されたのであった。

明治・大正・昭和を生きぬき、評論に、小説に、戯曲に、常に時代に超然とするかのごとくして、またよく時代に即して、長い文学生命を保持した白鳥の全生涯とその代表作をここによく整理し、記述していると思う。

立教大学日本文学研究室にて

福田 清人

目次

第一編 正宗白鳥の生涯

- ふるさと・瀬戸内——恵まれた生い立ちにも……………一
- 宗教と文学——文学は神よりも魅惑的である……………二五
- 評論から創作へ——自然主義の波とともに……………四〇
- 自然主義の時代——白鳥的と称される文学の世界……………五九
- 戯曲と評論——自然主義の時代は去つても……………七三
- 郷愁——奔放な晩年の活動……………八七

第二編 作品と解説

- 何處へ……………九六
- 短編集『白鳥集』……………一〇四



短編集『白鳥小品』	一三
作品集『入江のほとり』	一三〇
人生の幸福	一三〇
光秀と紹巴	一四〇
現代文芸評論	一四八
自然主義盛衰史	一五七
お伽噺・日本脱出	一六四
人生恐怖図	一七三
年譜	一八一
参考文献	一八八
さくいん	一九九

第一編 正宗白鳥の生涯



「暗黒の死の洞門へ一步步々足を進めてゐる我々人間に何の眞の幸福があらうぞと私はつねに思つてゐる。屠所としよの羊に異ならない身でありながら、幸福を夢みるのは不思議なことだと思つてゐる。それにも関はず、生きてゐるうちは幸と不幸、快と不快の感に動かされない時は無い。」（「人生五十」より）

白鳥はきわめてまじめに生きた。そのまじめさが、時として、物ごとを裏面よりさぐらねば氣のすまぬような状態へ彼を追いこむこともあった。「ニヒリスト」の定評もそんな事情によつてゐるのである。事実、率直な疑問と、読者をはばからぬ警句は彼の文章の身上であつた。右の引用がそれを如実にあらわしている。そしてそれは、我々にも多くの共感を与える。

正宗白鳥の名を知らぬ人は少ない。それにもかかわらず、若い人たちには、彼が小説家であつたことを知る人も案外少ない。自然主義の大家としての名声を知りながら、彼が小説家であつたのを知らぬというのも多

少奇妙な話であるが、今日の大学生・高校生の人たちには、昭和初年からの、小林秀雄と並び称された評論家白鳥の印象が強く焼きつけられているためであろう。ところが自然主義の大家と呼ばれる通り、白鳥は、田山花袋、島崎藤村、徳田秋聲とともに日本の自然主義文学を完成した功労者のひとりであり、その本業は、終生、小説(または戯曲)を書くことであつた。しかも、特異なニヒリズムをほめかす彼の文学は、今日なお根強い愛読者をもち、白鳥物以外は取りあげないという劇団もあるほどである。その読者は、漱石、藤村、龍之介などのように数多くはないが、それだけに熱狂的なものがある。すなわち、そこに白鳥文学の秘密があるといえはしまいか。藤村、花袋の研究は進んでおり、その伝記もほぼ完成されている。秋聲も、先年ようやくまとまった伝記が出た。しかし、白鳥はとり残された存在といえよう。

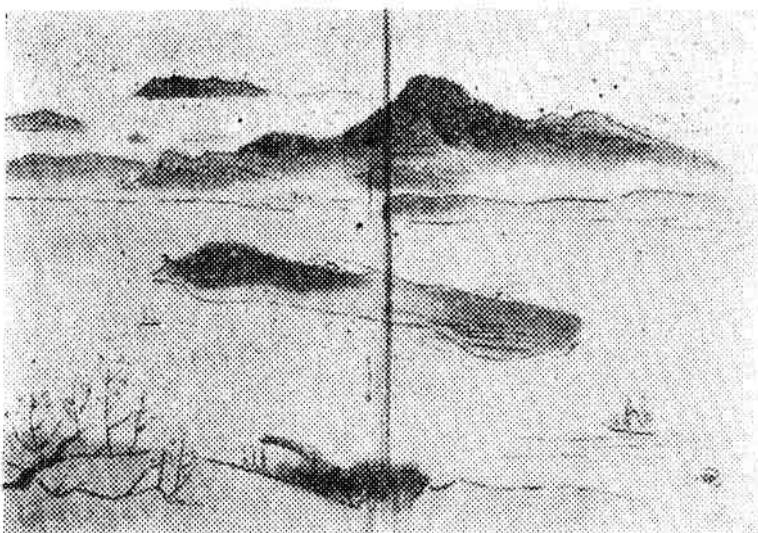
筆者は、必ずしも白鳥に心酔するものではないが、その特異な味を捨てがたく思っているひとりである。日本に文学が存続し、その歴史が残る限り、白鳥の名も永久に消えることはあるまいが、単なる過去の文豪としてこのままとどめるには惜しいし、また、それだけではすまされないものも持っている。ここに筆者は、本書がただ、過去の一功労者としての作家を紹介するのみではなく、今日なお生き続けるその精神を味わい、何らかの資とするところあることをせつに希望するのである。

「私は、自然主義作家として極印ごくいんをおされてゐて、それに異議を申し立てる気はないが、自然主義を信奉して筆を採つたことはなかつた。書きはじめからこの派の一員として認められたことは、文壇的に得を

した訳だが、幼少の時から東西の文学に親しんだ私は、空想に耽けることに生存の醍醐味を覚えてゐたのであつた。その私の空想も卑俗に陥り勝ちで、奔放自在の影もなく、自分の過去の作品を見て、文章からして、どうしてかういぢけてゐるか、我からあきれることもあるのである。私は、自分の作品に対する他人の批評は、目につく限り読んでゐて、長年月の間、かなりの好評が続いてゐるのを不思議に思ふのであるが、日常自分で見てゐる自分と、他人の見てゐる自分との相違を可笑しく思つてゐる。だれでもさういふものなのだらうか。どちらが本当の自分やらわからないうちに、今日の自分となつた。よくも悪くも終末となつた。」

右は「わが終末記」の一節であり、死の十か月ばかり前の文章である。時に彼は満八十三歳の高齢であつたが、自己の特色をかなり正確にいいえている。その表現ぶりも、往年からの面目を彷彿させるに十分である。

白鳥は、自然主義の中に成長、活躍した作家であるが、個性はむしろ強い主観にあつた。その主観がおさえ切れないまま自然主義の作風を受けたところから、特異な文学を形成して行つたのであるが、そこには、幼年時代の環境および肉体的条件、さらには少年時代に自らとびこんで行つたキリスト教との問題などもかゝらんでいて、評論家から、自然主義作家、戯曲作家、再び評論家、そして晩年の自由な活動と、多彩な作家生活の根底を支えて行くのである。



穂浪湾（得三郎による）

瀬戸内の
静かな入江

ふるさと・瀬戸内

——恵まれた生い立ちにも——

正宗白鳥（本名忠夫）は、明治十一年（一八七九）三月三日、岡山県和気郡伊里村穂浪一五二番に、正宗浦二の長男として生まれた。伊里村は、現在の備前町である。そこは、兵庫県に近く、岡山市と赤穂市あこうのほぼ中間に位置する、瀬戸内の穏やかな入江の一角であった。白鳥も、「二家族」「入江のほとり」など、故郷に題材をとった作品を多数残しているが、その情景は、洋画家であった三弟正宗得三郎の『ふる里』によると次のようになる。

「郷里の家の二階の窓は、前に海が展開し後に山が控ひかへてゐる。瀬戸内海入江の一端なのである。

入江の海面は五月の快風にも静まり返つてゐる。湾口を小島が塞ふさいでゐるので、まるで沖が見えない。湖ともいへる位くらいで、漁いさる舟は点々として数へられる位である。後の山は窓に対して平均のとれる高さであるが、一つの峯はやや高く寂せきとして仙山の面影がある。入江は、穂浪湾又扇浦の雅名がめい

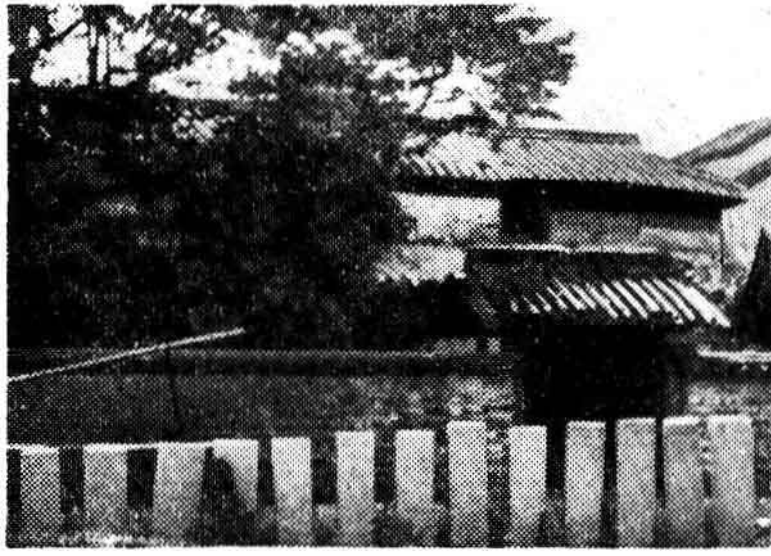
がある。山の高峯なのを虎溪山こけいざんと称なづけてゐて、共に私の曾祖父の風流から命名したものであつた。」
 また、村の当時の事情については、白鳥自身が、明治四十一年三月に発表した作品、「五月幟さつきのはり」の中で、次のように書いてゐる。

「『穂浪村は人家三百戸』と、小学の教師は二十年も前から児童に教へてゐる。この三百戸の八九分は漁業か農業、或は漁農兼帯で生活を立てゝゐる……で、海が荒れて不漁が続いたり、暴風雨や虫害で麦や稲の充実みのりが悪いと商人も大工たいくも石屋も畳屋も、或は僧侶かんにゆし神主、皆その影響を受けるのだ。……」
 およそ、これらによつても、白鳥の生まれ故郷の概略は想像できよう。農漁業を中心に村の生活が営まれていた、地形も気候も穏和な瀬戸内の一角、そこが彼の生命を培つちかつた揺籃ようらんの地であつた。

しかし、穏和とはいいながら、この地方にも、冬も来れば波風もたち、さまざまの人がさまざまの人生絵図をくりひろげていた。この故郷の風土が彼に及ぼした影響などは、おいおい記して行くことにする。まず、その一番身近な正宗家の一族から眺ながめて行こう。

旧家の人々

正宗家は、土地に二百余年もつづいた旧家で、屋号は亀屋と呼ばれ、天明年間に建つたと伝えられる家屋が現存している。土地随一の名門であつた。薬の製造や陶器の積み出し（和氣郡の一带は、伊部焼いんべ・閑谷焼しずたになどのいわゆる備前焼の産地である）をやつたこともあるらしいが、だいたいは地主と網元あみもとで、村の実力者であつた。



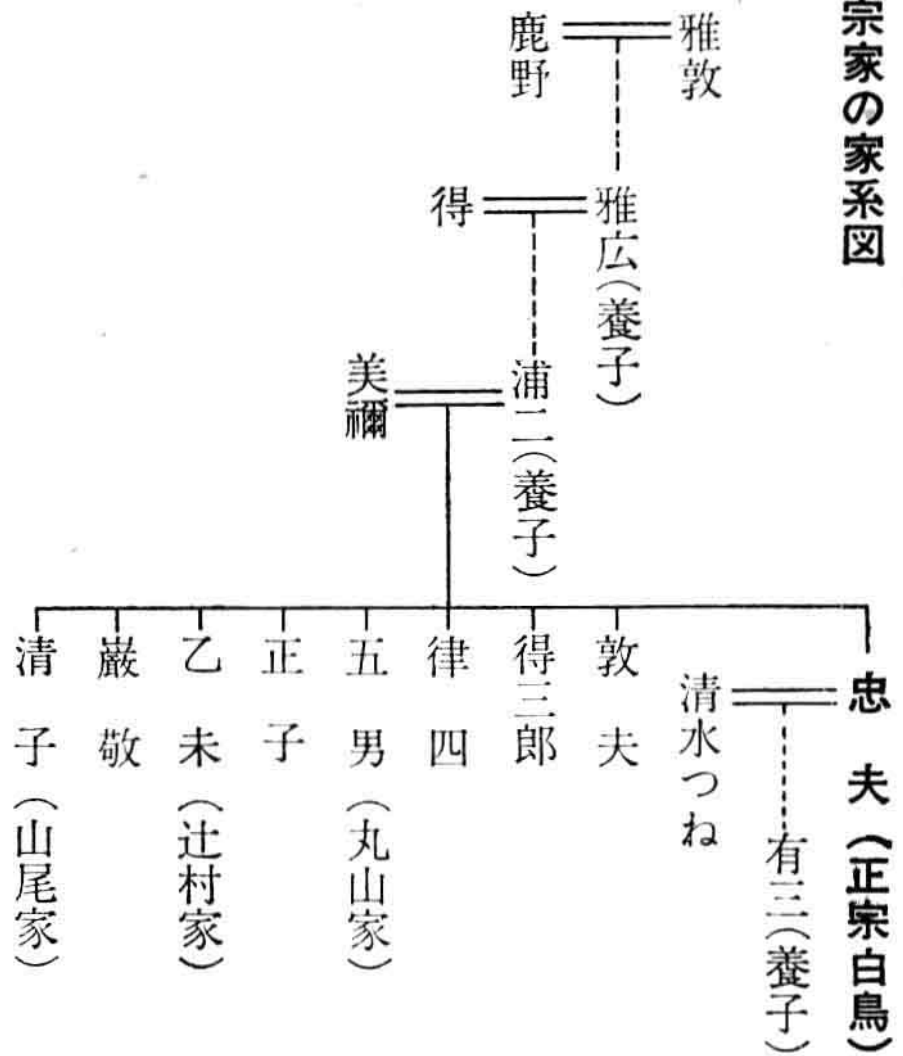
白鳥の生家

さて、家系図によってもわかるように、正宗家では、二代つづいて子がなかった。曾祖父雅敦は、妹（委細不明）の子雅広を養継嗣とし、雅広は、叔父すなわち雅敦の弟直胤の子浦二を養継嗣とした。この浦二が白鳥の父であるが、彼には学者の血が流れていたらしい。雅敦と直胤兄弟はともに『国学者伝記集成』に名を連ねるほどの人であった。この血が二代のちに大いに活躍するのである。

父浦二は、歴史に名を連ねるほどの人ではなかったが、小学校長、村長から金貸しまでした多能な人で、村の信望を一身に集めていたらしい。明治十四、五年ごろ、西南戦争後のインフレと、政府が建て直し策として強行したデフレ政策の際には、さすがの正宗家も多少動揺したらしいが、それもなんなく乗り切って、以前にもまして家運を盛り返した。のち、土地の銀行の検査役などもし、白鳥は「この頃のこと」の中で、「私の父は算術と書が上手なので、故郷で石碑や看板などに父の筆跡を見ることが多い」とも書いている。つまり、向学の血を受け、自ら実業の精神を持っていた人でも評しておこう。

ところで、正宗家では、三代にわたって讃岐国多度津藩士岡田家と婚姻を結んだ。曾祖母鹿野、祖母得、母美禰は、ともに岡田家の血統であった。讃岐国は現在の香川県、瀬戸内海をへだたてて両家は密接に結ばれていたのであるが、いかに幕末の世とはいえ、士族の娘が三代もつづいて農家に嫁したと

正宗家の家系図



いう事實は、正宗家が相当の豪家であったことを如実に物語っているのである。

右のように、白鳥およびその兄弟は、豪家と士族の結びついた血を受けていたことになる。しかも、母美禰の父は多度津藩の漢文の指南役であった。いずれの血からしても、彼らがすぐれた兄弟であるべき条件は整っていたことになる。

白鳥は、兄弟が十人あったと語っているが系図でわかるように、戸籍上は六男三女の九人しか明らかにされていない。たぶん、ひとりには記載されぬうちに夭逝したものと想像される。ここで白鳥の兄弟について一応概略のみを説明しておこう。

次男敦夫は土地にとどまった人であるが、国文学

者であり、古書の複製頒布はんぷにつとめてその名を知られ、今日なお国文学関係の学者はその恩恵おんけいにあずかっている。大正十四年、与謝野夫妻とともに刊行した『日本古典全集』全六期二百六十七冊、昭和六年に編纂へんさん刊行した『万葉集総索引』がその業績の最たるものであろうが、なかならずく前者などは昭和二十一年までもかかっ

た大仕事であった。彼は、若いころより歌に心を寄せ、歌人としても知られ、歌集『鶏肋』けいろくが残っている。

三男得三郎は洋画家であり、随筆などの著書も残している。四男律四は無名の画家、五男五男いっおは丸山家に養子入りした事業家で、日本パイプの取締役会長になった人であり、六男巖敬いんけいは理学博士で金沢大学の教授である。三女のうち、長女正子は嫁する以前に死去しているが、次女乙未おとみは理学博士辻村太郎の夫人であり、実名で文筆を執ったこともあった。三女清子すがこは、姫路の神官山尾家に嫁した。

中で、四男律四のみは、生涯その志を得ず不遇な人生を終始した変わり者であった。初め郷里で小学校の教員をしていたが、その給料をためて上京し、画家を志したがついに無名のままであった。時には小説を手がけたこともあり、骨董品の掘り出しがじょうずだったと伝えられるが、晩年は、郷里で鶏を飼いながら気ままな寂しい生活を楽しんだという。個性が強く、白鳥も、自分にいちばん似ている弟として彼を数多く作品化し、「律四の絵は総じて暗いが、中には三男の画より深みがあると思へるものがある」と語ったこともあるという。

いずれにしても、正宗兄弟が優秀であったことは否定できない。補足すれば、従弟正宗一も東北大学医学部の教授であった。つまり、彼らは先天的に、学問的・芸術的・実業的なものを内包していたのだといえそうである。